



林語堂による英訳「鶯鶯傳」前書きの検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 徳子, Uehara, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/6661

林語堂による英訳「鶯鶯傳」前書きの検討

上原徳子

A study of Lin Yutang's Preface to the English translation *Yingyingzhuan*

Noriko UEHARA

はじめに

筆者は、論文「林語堂による英訳「鶯鶯傳」について」(『アジア遊学』218、勉誠出版、2018年)において林語堂による英訳「鶯鶯傳」の内容を分析した。しかし、紙幅の関係上、林語堂が引用した資料について踏み込んだ検討を行うことができなかった。そこで、本稿では前稿を補うため、前稿で踏み込めなかった「鶯鶯傳」前書きについての検討を中心に述べることにした。

なお、本稿は底本として、*Famous Chinese Short Stories* (中文題目：英譯重編傳奇小説)(N.Y.:The John Day Company,1952)を用いた。「鶯鶯傳」はその中に“Passion”という題目で収められている。

—

林語堂版「鶯鶯傳」“Passion”のあらすじは以下の通り¹である。

- ①二人の出会いから二十年後元稹が若き日を思い出す。以下は彼の回想であることが示唆される。
- ②元稹 22 歳。試験のために上京する途中蒲城で崔家の別荘の隣の寺に逗留する。
- ③二人の出会い。城内の混乱に巻き込まれそうな崔家の未亡人と子供たちのため知人を頼み困難を救う。その過程で崔家の娘を見かけ心奪われる。崔家の未亡人は元稹をお礼の食事に招き娘を紹介する。
- ④元稹が鶯鶯に詩を送り、二人は密かに会うが、鶯鶯に拒絶される。
- ⑤二日後、鶯鶯の自献。しばらくの相思相愛の時間。試験のため二人は別れ、再会と再びの離別。
- ⑥元稹が試験に失敗し、連絡が途絶えがちになる。楊巨源が間を取り持つ。元稹から詩が送られる。
- ⑦楊巨源は元稹の不誠実な態度を不審に思い調べてみると元稹は既に他の女性と懇ろになって

いた。楊巨源は元稹が別れるつもりであることを鶯鶯に告げる。

⑧元稹が結婚後の鶯鶯に会いに行くが拒絶される。最後に鶯鶯自身が元稹に言葉をかける。

この内容については前掲論文内ですでに検討したが、林語堂版は原作の唐代伝奇小説「鶯鶯傳」の話の進行を追いながらも、①部分が創作され付け加えられているのが特徴であり、また作品を元稹の自伝として明確に規定している。細かな点については、次に詳しくみていきたい。

二

Famous Chinese Short Stories の各編には全て前書きがあるが、“Passion” に附されている林語堂による前書きは、各短編の中でも目を引く長さである。林語堂が特に説明が必要だと考えていたことが推測できよう。ここでは、その前書きの内容を前掲のあらすじを用いて検討していく。

次に挙げるのは、前書き中の後半部分、彼が英語翻案について自ら具体的な説明を加えている箇所日本語訳である。ⁱⁱ

私は原作の隙間を埋めるのに、元稹自身による詩に依拠した。

1. 原作は鶯鶯の恋人への手紙を含んでおり、これは傑作とみなされるが、本編ではその恋人から彼女への最初の手紙は省略されている。本編は単に、恋人が彼女に返事を書けないことを「説明するために手紙を送った」と述べているだけである。私は彼の「古決絶詞」（古代文体における別れの詩）によってこの重要な隙間を埋めた。元稹は、実際には恋人の彼への忠実さに疑いを抱いていた。彼はアメリカの言い方では、「卑怯者」であった。
2. 原作には鶯鶯が彼を密会に誘う詩があるが、彼が最初に彼女に書いた詩は隠している。私は浮き花びらその他について書いた彼の「古艶詩」から数行を引用した。
3. 20年前に聴いた寺の鐘を思い出す彼の感情についての最初の段落は、彼の詩「春暁」から取られている。
4. 「似笑非笑」と香水の回想については、実際に「鶯鶯詩」と題された彼の詩から取られている。
5. 密会についての他の資料は、白居易に送った彼の長い自伝的詩（訳者注：「夢游春詞」）から取ったもので、その全てのエピソードは夢の幻想として語られ、続いて韋という女性との結婚について述べられている。鶯鶯は原作では、公の場所では恥ずかしがりで控え目で、あまり話さないが、頭脳明晰で現実的な女性である。私は書かれている内容は実物そのものだと思う。

友人の楊巨源も実在の人物であり、原作にも登場していた。

以上が林語堂自身が具体的に自分の翻訳内容について言及している箇所である。意図を持って改編を加えていることが明確であることから、本稿では、“Passion” を翻訳ではなく翻案として論じていきたい。

まずあらすじ①部分は、前書き3と4部分にあたる。

まず前書き 3 には①部分が「彼の詩「春暁」から取られている」とあるが、「春暁」とは次の詩である。

春暁ⁱⁱⁱ

半欲天明半未明、	半ば夜が明けようとしながら半ば明けておらず、
醉聞花気睡聞鶯。	酔っては花の匂いをかぎ、眠っては鶯の声を聞いている。
狻兒撼起鐘声動、	小さな犬が寺の鐘の音に感じて動き出し、
二十年前暁寺情。	二十年前の明け方の寺の様子が思い出される。

次に前書き 4 では、「似笑非笑」と香水の回想については、実際に「鶯鶯詩」と題された彼の詩から取られている」とある。林語堂版本文では次の部分にあたる。なお本文部分は筆者による日本語訳を示す。

彼は寝床に横たわり、青白い空にかすんで微かに輝く星とそれから連想される息苦しい感情、強い香水、そして彼の初恋の人の顔に浮かんだ微かなほほえみを思い出していた。^{iv}

前書きのいう「鶯鶯詩」でこの部分に該当するのは以下のとおりである。^v

依稀似笑還非笑、	まるで笑っているかのように笑っておらず、
彷彿聞香不是香。	香りがするようで香りではないようだ。
頻動橫波嬌不語、	しきりに視線を送るがかわいらしい彼女は語らず、
等閑教見小兒郎。	簡単に若者に見てもらうのだ。

まず「春暁」には 20 年前とはっきりと書かれ、これが元稹自身が 20 年前の自身の恋愛を思い出すという設定を意識させている。また当時の鶯鶯を思い出す部分も、詩からその笑顔と香りを連想させる表現をとり入れていた。

あらすじ④部分は、前書き 2 にあたる。張生（林語堂版では元稹自身とされる）から鶯鶯に初めて送られた詩が原作には無いことから、「私は浮き花びらその他について書いた彼の「古艶詩」から数行を引用した。」とある。該当の部分は以下の通りである。

緑の光は静かな広い中庭を満たし、
 (普段はうるさくさえずる) 鶯も、今は日陰に隠れておとなしい。
 (家から) 閉め出された恋人は、庭の小川に浮遊する花びらだけを見て、途方に暮れている。
 夜明けの傾く月を見ながら、私の心は (恋人の) 美しい顔を思い浮かべて夢中であったが、彼女の優しい身のこなしや優雅な微笑に出遭えるかもしれないという微かな望みに打ち震えた。^{vi}

この部分がもとづいたとされる「古艶詩^{vii}」のうち、上記に該当するのは以下の部分である。

深院無人草樹光、 庭の奥には人影はなく草木の光があり、
 嬌鶯不語趁陰藏。 さえずる鶯は鳴かずに隠れてしまう。
 等閑弄水浮花片、 暇に任せて水に戯れ花びらを浮かばせ、
 流出門前賺阮郎。 門前に流して若い男性達を楽しませる。

ここでは、庭の木々と小川に浮かび流れる花びらのイメージをとりいれていることが確認できる。あらすじ⑥部分は、前書き1にあたる。林語堂が「彼の「古決絶詞」（古代文体における別れの詩）によってこの重要な隙間を埋めた」と述べた部分は、「鶯鶯傳」で張生が試験に合格できず都に留まった際に鶯鶯に送った手紙の内容が書かれていないことを指している。ここからは林語堂が「鶯鶯傳」に鶯鶯の手紙の内容のみが書かれているのを「隙間」だと考えていたことがわかる。この部分に該当する本文訳は以下のとおりである。

ああ！この1年間の離別の間に天の川の向こう側で何が起こるか誰も分からないだろう。
 ①私の将来進む道は雲の流れのように当てにならないし、あなたがいつまでも雪のように
 純粋だなんてどうして言えるだろう。②春に桃の花が咲く時、そのバラ色の花びらをもぎ
 取ろうとする者を誰が止められよう。③最初にあなたの好意を受けたことは幸せだが、そ
 の褒美（彼女）を手に入れる幸運な者は誰だろう。ああ、④待つこと1年、そしてもう1
 年が過ぎるまでどんなに長く感じることだろう。無限に待つことよりも、いつそのこと永
 遠に分かれてしまった方が良いのではないだろうか。¹¹¹

林語堂が利用したのは以下の詩である。関係のあるところに二重下線を引いた。

古決絶詞¹¹²

乍可為天上牽牛織女星、不願為庭前紅檜枝。
 七月七日一相見、相見故心終不移。
 那能朝開暮飛去、一任東西南北吹。
 分不兩相守、恨不兩相思。對面且如此、背面當可知。
 春風撩亂伯勞語、況是此時拋去時。
 握手苦相問、竟不言後期。
 君情既決絕、妾意已參差。
 借如死生別、安得長苦悲。
 噫春冰之將泮、何予懷之獨結。
 有美一人、於焉曠絕。
 一日不見、比一日於三年、況三年之曠別。
 水得風兮小而已波、荀在苞兮高不見節。
矧桃李之當春、競衆人而攀折。
我自顧悠悠而若雲、又安能保君皚皚之如雪。
 感破鏡之分明、睹淚痕之餘血。
幸他人之既不我先、又安能使他人之終不我奪。
 已焉哉、織女別黃姑、一年一度暫相見、彼此隔河何事無。
 夜夜相抱眠、幽懷尚沈結。
 那堪一年事、長遣一宵說、但感久相思、何暇暫相悅。
 虹橋薄夜成、龍駕侵晨列。
 生憎野鶴性遲迴、死恨天雞識時節。

曙色漸曠曠、華星欲明滅。
一去又一年、一年何可徹。有此迢遞期、不如死生別。
 天公隔是妒相憐、何不便教相決絶。

本文の訳にみられる順番に該当の部分の訳を挙げる。

①「我自顧悠悠而若雲、又安能保君皚皚之如雪。」

私は雲のように悠々としていたいと思うが、あなたは雪のように真っ白で清らかなままでいられるのだろうか。

②「矧桃李之當春、競衆人而攀折。」

桃の花の咲く春には、人々は競って木に登って枝を折るというのに。

③「幸他人之既不我先、又安能使他人之終不我奪。」

幸いに今は他の人は私より先んじてはいないが、どうやって他の人が私を出し抜くことがないようにさせられようか。

④「一去又一年、一年何可徹。有此迢遞期、不如死生別。」

一年過ぎてまた一年が過ぎて、一年はいつ終わるだろうか。このように遙か長い時間ならば、死んで永遠にわかれたほうがいい。

ここでは、7月7日の七夕を舞台とする詩全体の設定を踏まえながら各部分をそのまま使用していることが確認できる。

最後の前書き5「密会についての他の資料は、白居易に送った彼の長い自伝的詩から取ったもので、その全てのエピソードは夢の幻想として語られ、続いて韋という女性との結婚について述べられている。」とあるが、どの部分かは漠然としており、どのように「夢游春詞」と対応しているのか特定は難しいと考えた。

以上のように、前書きで自身が述べたことが、本文に反映されていることがわかった。そのほとんどが、『元稹集』の外集巻第一の補遺からとられていたが、林語堂が実際に元稹の別集をみていたのかもしれない、それとも何らかの種本があったのかもしれない、翻案する際の材料を何から得たのか現段階で特定には至っていない。

三

次に、前書きの残りの部分、林語堂の「鶯鶯伝」そのものへの評価について検討したい。前書きの前半部分の日本語訳は以下の通りである。

中国文学で最も有名な愛情物語は名高い詩人元稹によって書かれた。彼は誰か他の人に起こった物語として書いたが、これは明らかに自伝である。日付も、出来事も、登場人物も非常に現実的で、彼自身のものとあまりにもぴたり一致しており、作者の個人的な感情は非常に深いものであり、彼自身のロマンスの自伝的な叙述であると考えざるを得ない。物語の中で恋人に張という名前をつけて見え透いた偽装をしているが、彼の友人たちを欺くことはできず、非常に生々しい物語は、多くの噂話と好奇心を誘った。作者は、彼の生

きた時代において注目に値する二人の詩人のうちの一人であったが、照れくさい思いをしつつも、彼のロマンスについての物語や感情を抑えることが出来なかった。そして恋人の名前であるオリオール（鶯鶯）という語は、それが双文と偽装されない場合でも、その名前の中にある二重音を指示して常に彼の詩に紛れ込んでいる。彼女こそは彼の初恋の人だが、彼がその名前を覚えているのには特別な理由があった。

本編は、恋人が少女を捨て、ばかげた言い訳をするようになる部分までは元稹自身の物語に忠実に従っている。彼は恋人に鶯鶯を帝国を破滅させた歴史上の美女達に喩えさせ、実際に捨てられた恋人に「妖孽」という男性を破滅するために生まれてきた「悪霊」を指す言葉を使っている。元稹はまた、この話を聞いた恋人の友人たちは、「そのうち過ちをやめる」ことで彼を賞賛したと言っている。元稹は、立派な詩人であり、後に高官となったが、性格が好ましくなく、概して尊敬されていなかった。

元稹の多くの自伝的叙述と詩はこの愛情物語が彼自身について書いていることを確信させるものである。とりわけ、私は、この話では鄭と呼ばれる母方の叔母が、家から物を盗んでいく兵士たちと悶着を起こし、甥（訳者注：元稹）によって救われたということだけを述べれば十分であろう。ここにたくさんの証拠を提示することができる。

まず、ここで明確に述べられているのは、「鶯鶯傳」は元稹の自伝であるという考え方だが、これは現在ではあまり支持されていない。だが、林語堂は、この作品を書くに当たってこの立場を強く支持していた。だからこそ、彼は元稹自身の詩から翻案の題材をとっている。また、彼は、前掲論文でも指摘したように、美女との恋愛を悪と見なす「尤物論」を明確に否定し、元稹個人に対しても非常に厳しい評価をしている。

林語堂は、さらに *Famous Chinese Short Stories* の序文においても「鶯鶯傳」に触れている。以下日本語訳である。

ここに収められており最も良く知られた恋愛小説である *Passion* は、この特徴（訳者注：序文前段の内容を指す）を持っているが、少なくとも強い感情的な要素がある…つまり静かでありとした高貴な生まれの少女が性体験を得ようとするのである。この小説は一流の詩人の書いたものであり、それを演劇化した『西廂記』が最も美しく詩的な中国語で書かれているので、古典的な恋愛小説になった。この小説の人気の高さは、これを基に8つの異なる演劇が存在するという事実によって示される。^x

“*Passion*” という英題からもわかるように、林語堂は「鶯鶯傳」の本質を恋愛、それも女性を中心とした恋愛として捉えていたことがわかるだろう。では“*Passion*”とは誰の情熱なのか。それは鶯鶯の情熱と捉えるのが自然であろう。

おわりに

一般に、「鶯鶯傳」は『太平広記』所収のものを参照するのだが、林語堂版は元稹の年齢を22才としており、『太平広記』の本文と一致しない。さらに、林語堂版「鶯鶯傳」に加えられ

た元稹の詩については彼が当時何を参照したものなのかわからない。『元稹集』の関連の部分を効率よく取り出して付け加えていることから、何か種本があるのか、または彼に協力者がいたのか、調査の継続が必要である。

林語堂が「鶯鶯傳」をあくまで元稹の自伝だと考えて行った翻案だが、前掲論文で述べたとおり、それがこの翻案作品の根幹であり、最も重要な部分である。前書き、及び短編集全体に対する序文から、林語堂が「鶯鶯傳」を鶯鶯の情熱溢れる愛の物語ととらえて翻案した意図がわかる。原作の構造をあまり変えることなく、「鶯鶯傳」を再解釈した作品というよりも、元稹自身を鶯鶯の相手の人物だと明確化し、そのために元稹の詩から多くの材料を加え、中国の古典小説を英語圏の読者に比較的そのままの形で紹介した作品と言えよう。

内容についての分析は、前掲論文の域を出ないが、使用した資料については、より疑問が大きくなった。林語堂がどのように、古典小説を英訳したのか、その過程については、今後他の作品を分析しより詳細に検討する必要がある。本稿はあくまで「鶯鶯傳」前書きの検証が目的であったので、残された疑問は今後古典小説の英訳全体の疑問として継続して調査し、別稿にて報告したい。

付記

なお、本稿で英文から日本語に翻訳するにあたり、元宮崎大学准教授平瀬清先生にアドバイスをいただいた。ここに記して謝意を表したい。無論、訳文に関する責任は筆者にある。

また、2018年9月「東山の会」にて本稿に関する発表をさせていただき唐代文学の専門家の意見をうかがうことができた。本稿執筆に際して参考にさせていただいたが、筆者の力不足によりご意見の全てを反映できていないことをお詫び申し上げます。

(2018年10月24日受理)

注・資料

i あらすじは、筆者前掲論文「林語堂による英訳「鶯鶯傳」について」による。ただし番号は便宜上今回新たにつけたものである。

ii *Famous Chinese Short Stories* の翻訳には、佐藤亮一訳『マダム D』(現代出版、1985年)があるが、佐藤氏の訳文には一部再考を必要とする箇所がみられるため、今回は上原による訳を用いた。前書き全文は最後に資料として掲載した。

iii 以下、本稿は詩の引用に『元稹集』(中華書局、1982年)を用いる。

『元稹集』 外集巻第一 補遺一 642頁

iv As he lay in bed, he recalled the sight of the pale sky with its dim, shimmering stars, the suffocating emotions associated with it, the strong perfumes, and the vision of a smile that was half a smile on the face of the girl who was his first love. (109)

v 『元稹集』 外集巻第一 補遺一 641-642頁

vi Green light suffuses the silent, deep courtyard;

The twittering oriole is silent, too, hidden in the shade.

The shut-out lover sees only flower petals

Floating out with the garden stream, and feels lost.
 I watched the declining moon at dawn,
 My soul lost in thought of thy lovely face,
 And trembled with the fainting hope
 Of a kindly gesture, a gracious smile. (117)

vii 『元稹集』 外集卷第一 補遺一 638 頁

本文引用部分の前に以下の四句がある。

春來頻到宋家東、垂袖開懷待好風。

鶯藏柳暗無人語、惟有墻花滿樹紅。

viii Alas! in this yearlong separation, who knows what may happen on the other side of the Milky Way? My future course is as uncertain as that of the clouds, and how can I be sure that you will be as pure as snow? When a peach flower blooms in spring, who is to prevent admirers from plucking its rosy petals? I am happy that I was the first to receive your favor, but who will be the lucky one to take the prize? Ah, a year to wait, and how long will it seem before another year is out? Rather than endure this endless waiting, would it not be better to part forever? (124-125)

ix 『元稹集』 外集卷第一 補遺一 641-642 頁

x Passion, the best known love story included here, has this feature, but at least there is an element of emotional intensity — a quiet and dignified highly born girl seeking sex experience. Because this story was written by a first-class poet, and because its dramatization known as Western Chamber was written in the most beautiful and poetic language the Chinese medium was capable of, it has become the classic tale of love. The popularity of this story is indicated by the fact that there are eight different plays based on it. (INTRODUCTION xiv-xv)

(資料) “Passion” 前書き部分

The most celebrated love story in Chinese literature was written by the famous poet Yuan Chen. He wrote it down as a story which had happened to someone else, but it was clearly autobiographical. The dates, the events, the characters were too real and coincided too well with his own, and the writer's personal emotion was too deeply felt for it to be anything but an autobiographical account of his romance. The thin disguise of the name “Chang” which he gave to the lover in the story did not deceive his friends, and the extraordinarily vivid story aroused a great deal of talk and curiosity. The author, who had become one of the two foremost poets of his day, was embarrassed, but he could not suppress the story or his feelings about it. And always, the word “Oriole” (Inging), which was the girl's name, slipped into his verse, when it was not disguised as Shuangwen, referring to the duplicated sounds in that name. The girl was his first love, but there were special reasons for his remembering it.

The version here faithfully follows Yuan Chen's own story until the point where the lover (Yuan Chen himself), abandons the girl and proceeds to make ridiculous excuses for himself. He makes the lover compare Inging to the historic beauties who ruined the empires, and actually uses the word

yaonieh, “evil spirit” born to destroy men, on his abandoned sweetheart. Yuan also says that the lover's friends who heard of the story commended him for “stopping a mistake in time.” Yuan Chen, although a brilliant poet and later a high official, was not generally respected for his character.

Many biographical details and poems of Yuan Chen make it certain that he was writing about himself. Among other things, I need only mention that his maternal aunt, also named Cheng as in this story, ran into trouble with looting soldiers and was saved by the nephew. There is too much evidence to present here.

In filling out the gaps in the original, I have depended upon Yuan Chen's own poems.

1. The original contains Inging's letter to her lover, which is considered a masterpiece, but omits the lover's letter to him. It merely says that the lover “sent her a letter to explain” his failure to return. I have taken lines from his “Ku Chuehchueh Tzu” (Poem Severing Relationships in Ancient Style) to fill in this important gap. Yuan Chen was actually casting suspicion on the girl's faithfulness to him. He was, in American terms, a “heel.”
2. The original gives Inging's poem inviting him to a rendezvous, but hides the poem he first wrote to her. I have taken some lines from his poem “Ku Yen Shih” about the floating petals, and so on.
3. The first paragraph about his sentiments in recalling the monastery bells twenty years ago is taken from his poem “Ch'un Hsiao,” or “Spring Morn.”
4. The line about “a smile that was half a smile” and the recalling of perfume is taken from his poem actually entitled “On Inging.”
5. Some other material about the rendezvous is taken from his long autobiographical poem sent to Po Chu-yi, in which the whole episode is told as a dream fantasy, followed by an account of his marriage to the Wei girl. Inging in the original was a girl who was shy and restrained in public and did not talk much, but who was clearheaded and practical. I believe the presentation was true to life.

The friend Yang Chu-yuan was a real person, too, and appeared also in the original.

(107-109)

本研究は JSPS 科研費 26580064 の助成を受けたものである。